



兵庫県立大学 生涯学習公開講座ダイジェスト

令和6年度 兵庫県立大学 生涯学習公開講座

【減災復興サイエンスカフェ～過疎が進む地域での復興はどうなるのか】

— 震災から20年目を迎えた新潟県中越地震被災地の現状から —

日 時: 令和6年11月16日(土) 13:30~15:00

受講者数: 17名(対面8名、オンライン9名)

会 場: 兵庫県立大学神戸防災キャンパス大教室

講 師: 澤田雅浩先生(減災復興政策研究科 准教授)

○テーマ・概要

2004年の新潟県中越地震では過疎が進む農山村が大きな被害を受けました。人口減少に拍車がかかる中、地域の主体的・内発的な取り組みとそれを支えた外部人材との関係で、活気のある地域の状況を再生することに繋がりました。しかし、震災から20年の節目を迎える現在、一層の高齢化・過疎化は進んでいます。地域は持続的でありうるのか、現状報告などを踏まえつつ考えます。

○内 容

冒頭、2024年1月1日に発生した能登半島地震に触れ、過疎化、高齢化が進む被災地に対して「復興より移住を」といった言説が被災地外から巻き起こっている現状に触れ、それについての意見交換を行いました。賛意を示す意見の中には、20年後のことを考えれば、子育てや若者、そして都市部にきちんとした投資をするべきではないか、というものもありました。

それらの意見交換を踏まえ、20年前に発生した新潟県中越地震の復興プロセスについての解説をおこないました。「地域復興」を掲げ、個人や世帯に対する支援だけでなく、コミュニティを対象とした支援が行われたことが紹介され、そのために復興基金が活用されたことが紹介されました。中越地震の復旧予算は約3000億円といわれており、その多くは施設復旧に用いられましたが、それより遥かに少ない予算で地域の「やってみよう」取り組みを積極的に後押しした結果、小さな成功体験とその継続による地域の活力回復に寄与したことが紹介されました。また、こういった取り組みの背景には、行政の理解や、他の被災地での復興の経験が参照されていることも説明されました。

結果として、被災集落そのものに暮らす人の数は減少したものの、ボランティアでの活動を契機としつつ、様々な「関わりしろ」によって現在では関係人口、といわれているような、外部人材との協働が地域を軸として進められていることで、人口減少が進む中でも復興プロセスがある程度良好に進められていることも紹介されました。一方で20年が経過すれば当初地域で頑張っていた人たちが活動できなくなるなか、当時は子どもだったり、地域外で働いていた人たちが少しずつ活動を始めており、そういった傾向を踏まえると、施策や支援によっては過疎が進んでいても地域の可能性はあるのだ、という議論が進められました。